

鈴木有郷牧師説教

6/26/2011 礼拝に基礎づけられた活動／礼拝なしの活動 ローマ5:1-5

先週の説教で、私はパウロと彼が批判するクリスチャンとの間に見られた葛藤について触れました。それは、礼拝を巡る意見の相違に關したものでした。

あるクリスチャンは、救いは神から 無償で与えられるものだ。だから我々は既に救われている。礼拝を重んずるのは良き行いに重きを置くことに他ならず、キリストの福音と矛盾する、というものでした。

この考えにパウロは真っ向から反対します。確かに人間は良い行いによって救われるのではなく、神の無償の赦しによって救われる。しかしそれは礼拝軽視につながらない。むしろ、礼拝重視につながる。何故なら、神の無償の恵みに深く思いを馳せるなら、私たちは感謝の思いに溢れ、神を礼拝をせざるを得なくなる筈だから。そうパウロは問題提起者達に反論したのでした。

パウロは続けて言います。礼拝なしで信仰は維持できない。礼拝しない者の信仰は萎縮し、枯渇し、やがては死んでしまう。

パウロは語気を強めて語ります。礼拝を重んじないあなたがたの本当の問題は、怠惰な信仰生活を恵みによる救いという神学的主張で覆い隠している点にある。そう言って彼は彼らを厳しく批判するのです。

このパウロの反論に依拠しながら、私は先週、日米合同教会も厳しいパウロの批判にさらされる危険はないだろうかと皆さん共に自問自答しました。

礼拝なしで委員会の仕事に関わる時、礼拝なしで交わりだけを楽しむ時、礼拝なしで教会のいろいろな活動 に力を入れる時、私たちはパウロに厳しく批判された人々と同じ轍を踏んでいるのでは、と問いかけました。

勿論、これに対する反論はあるでしょう。パウロの、恩寵のみによる救いという立場を徹底すれば、当然礼拝に重きを置く必要はないという考えが出てくることは考えられます。

しかし、この反論には無理があります。確かに、私たちの救いは、神から一方的に与えられた罪の赦しによるのであり、良い行いの代償としてもたらされるものではありません。しかし、ここで注意払わなければならないのは、神の無償の恵みは、それを私たちが感謝をもって受け入れる時に、実を結ぶという点です。

以下の比喩を参考にして考えると分かりやすいかもしれません。空気は、酸素は、すべての人に与えられています。悪人にも、善人にも、老若男女に無償で与えられています。ある人は良く頑張ったから多く、ある人は怠け者だから少なくということはありません。

しかし、私たちが酸素を吸わなかったらどうでしょう。その場合、酸素は何の役にも立ちません。私たちが酸素を肺に吸い込んだ時、つまり受け入れた時に、私たちが生きる上で不可欠な要素となるのです。

神の無償の恵みにも同じことが言えます。罪の赦しの恵みは、私たちがそれを受け入れた時に、私たちを生かす力となるのです。私たちがそれを心に吸い込み、それによって人生が生き甲斐あるものとなる時、神の恵みは私たちの中で実を結ぶのです。

それでは、このことと礼拝はどのような関係にあるのでしょうか。

賛美や祈り、聖書の言葉の朗読、その意味を解き明かす説教、そして信仰の同志達との交わす挨拶は、すべて神の一方的で無償の恵みを深い感謝をもって受け入れるという決意の現れなのです。

礼拝は、神の恵みを心に精一杯吸い込む行為なのです。神の赦しの恵みを人生の歩みの灯火として生きるという決意の表現なのです。「神様、有り難うございます。感謝してお受けします。」という意味なのです。

ですから、パウロはやはり正しかったと思います。神の一方的で無償の恵みを、私たちが感謝して受け入れる時、苦しみは勇気と変わり、愛不在の世界に愛の灯火が灯され、絶望へと変革されるのです。

礼拝なしに信仰は維持できません。消え行くばかりです。

礼拝こそ、私たちキリスト者に欠かせない信仰の糧です。